

「細見美術館所蔵 雪中雄鶏図」の現状模写及び装潢

博士 前期 課程 日本画領域 加藤 清香

《原本について》

伊藤若冲 紙本着色 縦 114.2×横 61.9 cm 1747(延享4)～1751(宝暦1)年頃 細見美術館蔵

伊藤若冲は、江戸中期の京で活躍し、当時から名の知れた絵師であった。中国、朝鮮花鳥画のひたむきな模写を通じて独自の画風を確立し、十年近くの歳月をかけて完成させた彩色の花鳥画三十幅の連作で、傑作といわれる「動植綵絵」や、画箋紙に淡墨・濃墨の使い分けにより出来る筋目を利用した水墨画作品、枳目描きの「白象群集図」に至る。

本制作「雪中雄鶏図」は、若冲が32～36歳頃の作品で、雪の降り積もった冬の日、地面に残った餌を探す雄鶏が描かれている。江戸時代の絵画を研究する佐藤康宏氏は、鶏には文・武・勇・仁・信の五徳を備えた人格者の比喻に用いられ、菊と竹は古来、高潔な人格を象徴していることから、「世俗を離れ、風雪に耐え、ひとり自己の信じる道を追求する求道者」を絵画化したとする解釈を呈示している。

屈折した竹や垂れ下がる雪の表現などは、若冲独自のデフォルメであり、後の「動植綵絵」(1757末～1766年頃)の為の技法の準備が整いつつある事がうかがえる作品である。本制作では、若冲に関する資料と原本の観察により「雪中雄鶏図」の現状模写を行い、彩色材料・技術・表現方法を学び、若冲に対する理解を一層深めていく事を目的とする。

《模写の工程》

1. 熟覧 カラー写真、作品資料から色を推測し、顔料で何パターンか色見本をつくり実作品と見比べ、正確な色味を記録する。(図1・2)
 2. 上げ写し 薄美濃紙にドーサ引き(滲み止め)をし、原寸大カラー写真の上に置き、筆の入りや抜け、強さなど、線の印象を意識しながら墨で上げ写しをする。(図3)
 3. トレース 上げ写した紙の上に本紙(雁皮、楮の混合紙)を重ね、ライトテーブルで下から光を当て、図像を透かしてトレースをする。念紙によるトレースだと、画面の汚れや筆圧による凹みが本紙に残ってしまう為この方法で直接線を取った。(図4)
 4. 彩色 熟覧時の色合わせや資料を元に全体のバランスを見ながら彩色すると同時に薄墨によるぼかしも行う。
 5. 装潢 作品の上に裂を廻して、和額装に仕立てる。
- 原本は掛軸だが、今後の保存や展示時の見やすさを考慮し、本制作では和額装にした。



図1 色見本



図2 色合わせ



図3 上げ写し

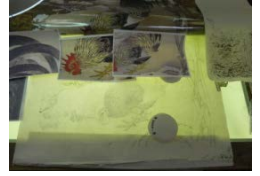


図4 トレース



上げ写し完成



線描完成



彩色途中

《まとめ》

原本は、全体に薄塗りで仕上げられ一見平面的な作品だが、実際に模写をしてみると墨のぼかしが作品の奥行きを出す為の重要な鍵となっている事が分かった。模写制作で使用した雁皮と楮の混合紙は、墨色が綺麗に出る紙だが、使い慣れていない紙なので要領を掴むまで手板でぼかしの練習を行い本番に移る。作業は一度で決めず、薄墨を何度も重ねムラが目立たないよう気を使いながら行った。

また、個々のモチーフに部分的に強い色が入る事により単調さを排しているし、画面全体に散らされた厚みのある雪(胡粉)は、作品全体のバランスを取っているようにも感じた。今回の制作を通して、想像以上に若冲の巧妙な技術とセンスを実感し、また、

そのこだわりは造形的な所は勿論であるが、画面の細部に渡っていることを一層感じ取ることが出来た。